

## 推薦文

文化科学研究科・地域文化専攻・教授 佐々木 史郎

本論文の執筆者袖木かおりは、修士時代より、ロシアの民族楽器と称されるバラライカとドムラに関する民族音楽学的研究を行ってきた。その学術的関心は、音楽学の枠組みにとどまらず、両楽器の演奏がもつ文化的、社会的側面にもおよぶため、文化人類学的な視点と方法論を援用している。彼女のフィールドはヨーロッパ・ロシアで、2000年から2年半にわたってモスクワのグネーシン名称ロシア音楽アカデミー大学院に留学している間に、しばしば地方へ出かけてフィールドワークを行ない、都市部だけでなく、農村部でのバラライカ演奏に関するデータも多数収集してきた。

彼女によれば、バラライカという楽器は、ロシアの民衆楽器にその起源は求められるものの、実態はソ連の文化政策によって作り出された「民族楽器」であった。本論文もそのことを前提としつつ、ソ連時代の農村におけるバラライカの演奏活動の実態を、1930年代から80年代にいたるソ連の文化政策と絡めながら論じている。本論文は、かつてホブズボウムらによって提唱された「伝統の創造」が、旧社会主義諸国で国ぐるみで熱心に行なわれていた事実を明らかにしてくれるとともに、旧ソ連のような社会主義国家が、国の文化、国民の文化をいかなるものとして位置づけていたのか、社会主義社会に必要な文化とは何だったのかということも示している。その意味で本論文は、ヨーロッパ・ロシアの地域文化研究であるとともに、社会主義社会論としても評価できる。

上記の理由により、本論文の貴誌への掲載を強く推薦するものである。